広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第35号　2007. 3〉

ユニバーサルシティズンシップを育む国際コミュニケーション学習のあり方を求めて　—1—

大和　浩子　松尾　砂織　簑島　隆　居川あゆ子
桑田　一也　風呂　和志　村上　直子　山﨑　裕昌
岡　芳香　三田　幸司　加藤　秀雄　神重　修治
杉川　千草　谷川　佳万　徳本　光哉　藤井　雅洋
池田　明子　洲濱美由紀　久原　有貴　深澤　清治
平川　幸子　長松　正康　山本　透

1．はじめに

本学園では国際的コミュニケーション能力を「確かな語学力を基に，様々なメディアを駆使して多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」と定義し，過去３年間「国際交流学習開発部会」と「マルチメディア学習開発部会」の２つの部会でそのカリキュラム開発について研究・実践を重ねてきた。本年度は，これまで「領域」として研究してきた内容を「教科」として完成させるに当たり，昨年度まで２つの部会が研究・開発してきた内容を検討・統合し，新たなカリキュラムを開発することを目的とし，研究を始めた。

2．昨年度までの研究の評価と今年度の展望

これまで「国際交流学習開発部会」では主に「外国人との直接的な交流学習」を通して，「マルチメディア学習開発部会」では主に「メディアを介した間接的な交流学習」を通して，それぞれ子どもたちにつけたい力は何かを探ってきた。

実際に，昨年度までの研究内容に関し児童生徒・教職員・保護者の三者になされた学校評価アンケート（平成18年９～10月実施）において，国際交流学習もマルチメディア学習も約７割程度の児童生徒・教職員・保護者が「できている（身に付いている）」と肯定的評価をしている。昨年度までの研究は一定程度の成果を収めていると言っていいだろう。

昨年度までの研究を通して「直接的交流」と「間接的交流」というコミュニケーションのあり方が国際コミュニケーション学習における大事な視点として明らかになってきた。21世紀を生きる子どもたちが自国の文化を大切にしながら他国の文化を尊重しつつ他国との好ましい関係を構築していく未来を想定した時，直接的交流と間接的交流の２つの視点は欠かせないものであると考える。以下に少し詳しく述べる。

実際に会ってその場の雰囲気までをも共有しながらフェイス・トゥ・フェイスで交流する中で，考え方の違いや感じ方の違いを克服し，好ましい関係を構築していこうという意欲が培われていくことには間違いはない。しかしそのようなフェイス・トゥ・フェイスの交流を日常的に行うことは大変に難しいのも事実である。多くの場合，他国の情報を得たり情報の交換を図ったりする場合には情報交換のためのツール＝メディアが介在する。メディアの種類によって，どのように発信・受信をするかを考えることなしに交流学習は成り立たない。よって，直接的交流においても間接的交流においても「何をコミュニケーションしていくか」「誰とコミュニケーションしていくか」という視点を大切にしながら，その意欲とスキルを総合的に子どもたちに身につけさせていくべきである。ゆえに，どちらかにかたよった学習ではなく，直接・間接両方の視点をもった学習内容を構築していくことが肝要であると考えた。

もちろんこのことは，国際交流学習がマルチメディア学習的視点を積極的に持つことで，あるいはマルチ

Hiroko Yamato, Saori Matsuo, Takashi Minoshima, Ayuko Igawa, Kazuya Kuwata, Kazushi Furo, Naoko Murakami, Hiroaki Yamasaki, Yoshika Oka, Koji Sanda, Hideo Kato, Syuji Kamishige, Chigusa Sugikawa, Yoshikazu Tanigawa, Mitsuya Tokumoto, Masahiro Fujii, Akiko Ikeda, Miyuki Suhama, Yuki Kuhara, Seiji Fukazawa, Yukiko Hirakawa, Masayasu Nagamatsu, Toru Yamamoto: Seek for studying in international communication to develop universal citizenship

メディア学習が国際交流学習的視点を持つことで，それぞれの学習で身につけさせたい力を昨年度までの研究よりも，より効果的に子どもたちに育むことができるという仮説が前提である。そのためにも融合的な学習内容を研究開発していく必要がある。

3．研究の概要

3．1　教科「国際コミュニケーション」の目標

以上の考え方をふまえて，本部会では教科「国際コミュニケーション」の目標を以下のように設定した。

> 様々なメディアを介した体験や直接体験をもとに多文化への理解を深めるとともに，内容や質を吟味した情報を発信したり，相手意識を育んだりすることを通して積極的・実践的なコミュニケーション能力を育み，世界市民として生きる態度を育成する。

3．2　めざす子ども像

前項の教科目標をもとに，3年間ごとの学年ブロックで具体的な「目標」と「めざす子ども像」を下表のように設定した。

なお，幼稚園での「国際コミュニケーション学習」は，これまで3年間研究してきた国際交流の視点とマルチメディアの視点を持った保育を引き続き研究・実践していく。本研究では，幼稚園を小学校や中学校で「国際コミュニケーション」を教科として扱う前段階の感性やかかわる喜びを育む段階と位置づけている。従って国際交流学習とマルチメディア学習を融合させた保育内容を新たに開発するのではなく，それぞれの視点を持った保育を行うものとして研究を進めていくことにした。

表1　目標とめざす子ども像

	全体	幼稚園	1～3年	4～6年	7～9年
目標	様々なメディアを介した体験や直接体験をもとに多文化への理解を深めるとともに，内容や質を吟味した情報を発信したり，相手意識を育んだりすることを通して積極的・実践的なコミュニケーション能力を育み，世界市民として生きる態度を育成する。	自国・他国の文化や人，また様々なメディアに出合いながら，かかわることに楽しさや喜びを感じたり，興味や関心をもったことに対して自分なりの方法でかかわろうとしたりする。	自分をとりまく多文化の存在に気付き，直接的・間接的に他者とコミュニケーションをとることでより広く自分以外の存在に目を向け，情報のやりとりにおもしろさを感じることができるようにする。	地域・国・時代など多文化とそれを築いてきた人々に親しみを持って接し，メディアを用いるなど様々な方法で相手の立場を考えながら積極的にコミュニケーションをとる中で，自分の生き方について考えはじめることができるようにする。	メディアの特性を理解し情報を吟味しながら，自国・他国の言葉や他の様々な方法を用いて主体的・積極的に他者とコミュニケーションをとり，ユニバーサルスタンダードの視点をもって自分の生き方を考え，発見することができるようにする。
めざす子ども像	様々なメディアや直接体験を通して多文化を理解するとともに，発信する内容を吟味したり，相手の立場に立って考えたりすることで，他者と豊かなコミュニケーションを築きながら，自分の生き方について深く考え，発見できる子ども	他国の文化や様々なメディアに出会いながら，好奇心とともに，楽しさ・うれしさ・おもしろさを感じることができる子ども	・身のまわりの多文化に気づき，それらに関わる人々へ関心を持とうとする子ども ・関わる相手への思いを持ち，メディアを使って情報のやりとりを楽しむ子ども	・多文化とそれらに関わる人々に親しみを持ち，積極的に理解しようとする子ども ・目的意識を持ってメディアを選択し，積極的にコミュニケーションをとろうとする子ども	・自国文化と他国文化の差異を理解しそれぞれのよさを尊重しながらよりよい関係の構築を求めて自分の考えを持ち表明しようとする子ども ・メディアの特性を理解し情報を吟味しながら，よりよいコミュニケーションのあり方を考え積極的に情報を活用しようとする子ども

3．3　つけたい力

これらの具体的な子ども像を実現するためには，どのような力を育むことが必要か議論した結果，現時点では以下の7つの力を設定している。これらの力は今後の実践・検証を経て整理統合することを前提としている。

①直接的・間接的に多文化を理解する力
②メディアリテラシーを生かしたコミュニケーション能力
③共生を求めて情報を積極的に活用し発信する力
④外国語を使ったコミュニケーション能力
⑤自国の言葉での自己表現力

⑥情報を科学的に理解する力
⑦情報社会に参画する態度と能力

①②③はそれぞれ国際交流学習とマルチメディア学習が効果的に融合した場合，どのような力を育むことが望めるかを考えて設定したものである。昨年度までの評価で「身に付いている」とされている「多文化理解」「共生・交流」の力がさらに伸びるよう，マルチメディア的な「間接交流」「メディアリテラシー」の視点を加えて設定した。

④については，昨年度の学校評価アンケートから，外国語によるコミュニケーションに自信のない子どもほど，共生・交流の自己評価が低いという相関関係があることが明らかになっている。このことからも，外国語を使ったコミュニケーション能力は欠かせない力である。また，⑤はコミュニケーション能力の基本として，昨年度までの研究でも大切にしてきた力である。

⑥⑦はマルチメディア学習においては大切な力であり，この力がさらに伸びるよう，扱う「情報」を国際交流学習とリンクさせながら効果的に育んでいくべきであると考える。

4．研究計画

前項までに述べた目標を実現するため，以下の４種の学習内容を考えた。

①自国語・外国語によるコミュニケーションの学習
②情報リテラシーを育む学習
③直接出会う体験を軸とした国際交流学習
④メディアを生かした国際交流学習

これら４種の学習を単元の特性に応じ単独あるいは複合的に構成し，その評価方法を模索しながらカリキュラムを完成するべく研究を進めていく。

○第１年次
- 新教科「国際コミュニケーション」の構想作成および評価方法の試案作成
- 国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
- ２年次の教科課程の編成

○第２年次
- 「国際コミュニケーション」の幼小中一貫カリキュラムの作成
- 国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
- 実践をふまえての評価方法・評価規準の妥当性検証
- テキスト試案の作成

○第３年次
- ２年間の研究を検証・修正，幼小中一貫カリキュラムの完成
- 評価・評価規準の完成
- テキストの作成

5．実践事例

5．１　幼稚園の事例

(1) 国際交流の視点より

①実践にあたって

幼児期にはいろいろな人とかかわる楽しさをしっかり味わうことで，いろいろな人に親しみをもってかかわろうとする気持ちを育むことができると考える。

平素より実態や時期などに応じて無理のない形で留学生と一緒に遊んだり活動したりしながら過ごす日を設定し，いろいろな人と出会い，親しみをもつきっかけになるように配慮している。

②ねらい

- いろいろな国の人と一緒に遊ぶことを通してふれあいを楽しむ。

③実践例―４歳児

11月17日（金）　＜やきいも＞

留学生が来ると，子どもたちの中には留学生に近寄って握手をしたり抱きついたりする姿も見られた。積極的な子どもは「僕ね，○○って言うんよ。」と自ら名前も教えている。不安がある子どもや留学生に興味のない子どもは保育者の手を握ったり，留学生に見むきもしないで遊んだりしている。

年中児のクラスには韓国のスヨンさんとインドのレディさんの２人の留学生が来てくれた。子どもたちは留学生の手をひいて滑り台を一緒に滑ったり山に登ったりしながら楽しそうに遊んでいた。

【一緒にあそぼう】

Ａ女は最初に出会った人には戸惑い近づかないことが多い子である。この日もＡ女とはとても仲良しの友だちのＢ女はスヨンさんにひっついて遊んでいるのに，Ａ女はＢ女の後ろからこそこそ様子を見ていた。Ａ女はスヨンさんに話しかけようとしない。そこで「スヨン先生に名前を教えてあげたら？」とＡ女に言うと「Ａです。」とスヨンさんに向かって言った。するとスヨンさんはとても優しい顔でＡ女の手を握って「おはようございます。私はスヨンです。」

【はい，チーズ！】

と言った。その瞬間，A女の表情は一気に明るくなり，その後はスヨンさんにべったり体をくっつけて身をゆだねている姿が見られた。あとでA女に「スヨン先生，好き？」と聞くと「大好き！」と即答していた。

出来上がったやきいもは留学生が適当な大きさに切りながら一人ずつ配ってくれた。「僕，大きいのがいい。」と子どものリクエストがあれば「このくらい？」「もうちょっと！」などのやりとりも楽しんでいた。そしてやきいもを食べながら，大きさを比べて「先生たちのおいも，大きくていいなぁ。」と言ったり，「おいしいね。」と話したりしながらホクホクのおいもを一緒にいただいた。

【やきいも，おいしいね。】

帰る前，外国の挨拶を教えてもらった。「日本では朝友だちにあったらおはようございますって言うね。韓国ではなんて言うのかな～？」とスヨンさんに聞いてみると「アンニョンハセヨ～です。アンニョ～ンと手を振ります。」と教えてくれた。すると子どもたちは嬉しそうに手を振りながら「アンニョ～ン」と口々に言い出した。普段耳にしないけど，スヨンさんの言い方が心地よかったのか，何度も発音していた。次にインドのレディさんに「こんにちは」を何て言うのかを聞いてみると「手を合わせて‘ナマステ’と言います。」と教えてくれた。すると子どもたちはまたもや大喜びで手を合わせて「ナマステ～」と繰り返した。そのとき，I男が突然気づいたように「これ，いただきますのときと同じじゃん！」と興奮したように叫んだ。形をみるとレディさんがおしえてくれたあいさつの仕方はいただきますのポーズと同じで，I男はそれに気づいたのだ。みんなは「本当だ」と言いながら「ナマステ」と何度も手を合わせて言ったり，スヨンさんが教えてくれた「アンニョン」を近くの友だちと言ったりしながら笑っていた。

④考察

今までに何度か留学生と過ごす経験をしてきた子どもたちは，留学生に驚くこともなく自然に受け入れている様子が見られた。その様子を見ていると，全然知らないお客さんが来ている雰囲気ではなく，いつも一緒にいるかのようにかかわっていた。これは，交流を重ねることで留学生を自然な形で受け入れ，一緒にいて楽しい人，やさしい留学生さんだと子どもたちが思えるようになっているからだと考える。

A女のように，最初は戸惑いながら様子を伺う子どももいるが，受け止めてくれる留学生さんがいることで，人とかかわる楽しさや嬉しさを感じることができたのだと考えられる。人に親しみをもってかかわる第一歩は実際に声をかけてみる，笑顔をかわしてみる，握手をしてみるなど，直接体験を通して得られるものである。だからこそ幼児期には直接人や物事にふれることが大切なのだと考える。

幼稚園には英語の絵本しかなく，今回は２人とも英語は話せない方だったため，絵本を読んでもらうことはできなかった。外国語といえば英語が第一に思いつくかもしれない。しかし外国語とは決して英語だけでなく，いろいろな言葉や文化がある。だからこそ英語に重きを置くのではなく，いろいろな言葉や文化があっておもしろい，いろいろな人がいておもしろいと感じることができるような気持ちを育むことが大切なのだと感じている。

他人を意識し始める時期にある４歳児だからこそいろいろな人とふれ合うことで，違いを受け入れたり同じだということに気づいたり，一緒にいることが楽しいと感じたりすることができるのであろう。それがコミュニケーションの土台となる部分だと考える。幼児期の子どもたちにとっては身近な友だちの存在がすでに多文化であり，身近な友だちとのかかわりの中で友だちのよさを認めたり思いやりの気持ちをもったりなど，友だちとの多様な経験を積み重ねている。自分をとりまく同年齢の友だち，異年齢の友だち，高齢者，外国の人々などいろいろな人がいる。それら様々な人を身近に感じ，親しみの気持ちをもってかかわることができる力を子どもたちに育みたいと考えている。

(2) マルチメディアの視点より

①実践にあたって

幼児期には，身近なものや人にかかわる楽しさを味わえる感性や，かかわる楽しさをより積極的に感じるための手段として，様々なメディアにふれることの楽しさを育みたいと考えている。

秋から冬にかけて，光や影の美しさを感じやすい時期になるので，ただ漠然とかかわるのではなく，積極的にかかわる面白さや楽しさを味わう体験を重ねさせていきたいと考えている。その際に幼児が発見したものを保育者がデジカメで撮影して保育室に掲示したり影当てクイズをしたりすることで，より積極的に身近な光や影にかかわろうとする意欲を高める。

また，身近な光や影の面白さを感じる体験をもとに，様々な色に光るクリスマスツリーを作る活動を取り入れる。その際に，クリスマスツリーのイルミネーションの映像を観て感動することで，様々な色のクリスマスツリーを自分たちで作る意欲を高める。

②ねらい

・いろいろな色の光や影ができることを見つけ，その美しさを感じることの楽しさを味わう。

③実践例—4歳児（11月～12月）

【エピソード1】虹色の影を見つけたよ

子どもたちが透明な空容器を使って色水遊びをしている。作った色水をどんどん外の机の上に置いていた時，机の下に小さな虹色の光が映っていたのを子どもたちが発見する。「見て！見て！虹ができたよ！」という子どもたちの声に，そばにいた他の子どもたちや保育者も見に来る。「わあ，すごいねえ！きれいだねえ！」と他の子どもたちもつぶやき，保育者は「えっ？どうしてこんな所に虹ができるの？」と尋ねてみる。すると，色水を作っていた子どもたちが机の上に並べていた色水の入ったカップを一つずつ動かしてみて，虹色の光が動いた時点で，「あっ，これだ！この色水が光っているんだ！」「虹色マジックだよ」と言う。保育者はその様子をデジカメで撮り，保育室に掲示する。子どもたちは「ここに虹色ができたんよね」などと写真を示しては話している姿が見られる。

子どもたちが発見したものをデジカメで撮っては，保育室に掲示したり，影当てクイズをして楽しんだりすることを積み上げてきた。そのことで，子どもたちは家庭でも自分の身近にある光や影に気がついては，「お家の廊下のドアを開けた所に，丸の影が二つと長四角の影が一つあって，顔の形に見えたよ」「車の電気で，右手を当てたら赤くなって，もう一つの手を当てたら黒くなったよ」など，保育者に話す姿が見られるようになってきた。

【エピソード2】ステンドカラーシールで遊んだよ

みんなで黒い紙でクリスマスツリーを作り，透明シートの部分にステンドカラーシールを貼って遊ぶ。廊下に持ち出して日光に当ててみると，下にカラーシールの様々な色が光ることを見つけて，様々な所で試してみる姿が見られる。
「廊下の前の白い所（壁）できれいな色が見えたよ」
「きれいな色で光ったみたい」
「廊下の下のグリーンの所で，全部光ったよ」
など，いろいろな光の美しさや，いろいろな場所で光る面白さを感じている姿が見られる。

エピソード1・2のように，様々な素材を自発的にあるいは意図的に使うことを通して，様々な光ができることに気づいては感動する姿が見られるようになってきた。

【エピソード3】クリスマスイルミネーションの映像をみたよ

保育者が美しいイルミネーションを撮ったビデオの映像を，大きなスクリーンに映し出して子どもたちみんなで観る場を設ける。「わあ，きれいだねえ！」「ぼく，これ見たことあるよ！ここに行ったことがあるよ！」「わたしはね，ちがうのを見たことがあるよ」など映像を観ながら様々なことをつぶやいている。また，保育者が「きれいな光だねえ。どんな色の光が見える？」と尋ねると「きいろ」「みどり」「あか」「しろ」など，様々な色が光っていることに気がつく姿が見られる。

保育者自身が実際に見て感動した映像を子どもたちとともに観ることで，保育者自身の語りかけが感動を伴ったものになることが実感できた。そのことが，子どもたちに美しいものを美しいと感じる感性を育むことにつながるのではないだろうか。

【エピソード4】みんなでいろいろな色に光るクリスマスツリーを作ったよ

イルミネーションの映像を観た後に（エピソード3），実際にみんなでいろいろな色に光るツリーを作る。円錐形のツリーの土台はあらかじめ保育者が作っておき，その上から子どもたちはいろいろな素材を使って貼り付けていく。具体的には次のとおりである。

・透明シートの上に，ステンドカラーシールで幾何学模様のような形，ツリーの形などを構成して貼る。
・いろいろなカラーセロファンを貼る。
・透明シートの上に，マジックで一色や虹色で色を塗ったり，星・三角・ツリーなどの形を書いていたりする。
・透明シートの上に，シールやマジックの絵を組み合わせて構成している。　など

できあがった円錐形のクリスマスツリーの内側に点滅ライトを入れ，暗くした保育室の中で様々な色に光るツリーを観る場を設ける。子どもたちはしばらくじいっと静かにツリーの様子を見ている。

④考察

＜光や影の美しさを感じることについて＞

保育者自身も感動することで，光や影の美しさに共感でき，子どもたちはさらにきれいな光や影を見つけようとする意欲を高めていることがわかった。子ども自身の感動や発見をしっかり受け入れるとともに，子どもの興味・関心に応じた素材の提示の大切さもわかった。

＜メディア機器にふれる楽しさについて＞

デジカメの写真を生かすことで，子どもたちは自分が発見したことを認めてもらう喜びを味わうことがで

き，そのことがさらに光や影の美しさや面白さを感じていこうとする原動力になることがわかった。また，イルミネーションの映像を観る場を設けることで，「こんなものを作ってみたい」というように具体的にイメージしやすいのではないだろうか。

子どもたちの感性を育むにあたっては，どのような状況の時にメディア機器を利用するのがより効果的なのかを今後も探っていきたい。

5．2　小学校の事例

(1) 単元について

○単元名　「広大へ行こう！」

○学年　小学校６年生

○実施時期　９月～12月

○単元の概要

本単元は，広島大学の留学生との直接交流（本校へのお迎え・広島大学訪問）と，その活動記録の活用を通しての間接交流を主な活動とする。

留学生と知り合い親しくなるきっかけ作りとして本校へ留学生を迎え，相手意識を持ってお迎えプランを実施し，一定期間後に大学を訪問し，同じ留学生から各国の文化・生活・遊びについて講義を受ける。活動の様子を子ども自身が撮影・編集したビデオレターを留学生に贈る活動と組み合わせることで意欲を継続させながら取り組ませることができる単元である。

○単元の目標

・留学生のお迎え活動や大学訪問を通して積極的に自国の文化を伝えたり外国の文化を知ったりすることができるようにする。　（多文化理解）

・留学生のお迎え活動や大学訪問に必要な英語表現を知り，活用することができるようにする。
（外国語を使ったコミュニケーション）

・相手意識を持って自分の思いが伝わるビデオレターを編集することができるようにする。
（情報の活用と発信）

○計画（全24時間）

第１次　留学生をお迎えしよう（８時間）

第２次　広大へ行こう！（６時間）

第３次　留学生にビデオレターを贈ろう（10時間）

○これまでの直接交流

（外国人観光客へのインタビュー活動）

本単元指導に先立って，修学旅行（６月）先で実施した。事前にあいさつや質問したいことについて簡単な英語表現を身につけ，当日に臨んだ。子どもからは，楽しみにしている様子とともに，初めて訪れる場所でのインタビュー活動に，「予想した返事じゃなかったらどうしよう。」「何か尋ねられたらどうしよう。」といった声が聞かれるなど，不安を感じている様子がうかがえた。

【金閣寺でインタビュー】

事後の感想にも「話しかけるのに勇気が必要だった。」の声が圧倒的に多かった。しかし，「練習した英語が通じてうれしかった。」「言葉がうまく通じなくても笑顔や身振り手振りで何とかなるんだ。」といった声も同時に聞かれた。

不安や緊張感を伴いながらの活動だったが，自国語や外国語を使ったコミュニケーションに対して自信を得た子どももいた。

(2) 学習の実際

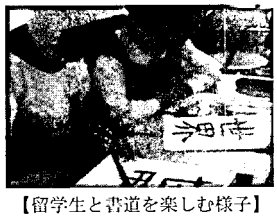
（交流相手の確保）

広島大学留学生支援センターと連携し，本年度短期留学生に活動プラン紹介と参加募集をしていただくよう依頼し，20名ほどの参加申し込みを得た。留学生の出身国については支援センターのほうで多様な国と地域になるようにとのご配慮をいただき，子どもの各グループにお１人ずつ位置づいていただける人数(16名)を確保することができた。

学習は９月中旬から始めたが，留学生の来日が本年度９月下旬ということで，子どもには申し込みのあった留学生の情報（人数・名前や出身国，自己紹介内容など）を随時伝え，学習意欲の向上を図った。

（第１次の学習）

留学生には，楽しんでもらうとともに自分たちの事を知ってもらえるよう，子どもたちは自分たちの普段の生活の様子や学校案内・日本の遊びや食文化体験などお迎えプランを工夫した。10月13日の交流当日は，各グループがお迎えプラン（２時間）と給食時間を留学生とともに楽しく過ごすことができた。


【留学生と書道を楽しむ様子】

留学生にはこの日までに第２次の活動内容（小学生が11月４日に広島大学を訪問し，留学生から自国の文化について講義を受ける）を伝えており，お別れのあいさつの中で「11月４日は広大で待っています。」と話された留学生もおられた。子どもは第２次の活動「広大へ行こう！」でも，同じ留学生と再会できると

【また大学でお会いしましょう】

いう期待感と今後の活動への見通しを持って第２次の学習を終えた。

（第２次の学習）

第１次で参加した留学生のほとんどが第２次の活動にも参加してくださった。子どもにとっては，自分たちがお迎えした同じ留学生から講義を受けることができるという状況となり，学習意欲の継続と向上につながった。

【自作資料で講義中の留学生】

当日は広島大学内の施設を自由に使わせていただき，各グループとも充分なスペースを確保した中で講義を受けることができた。留学生は，それぞれ印刷物やデジタルカメラの画像・パソコンを用意し，講義をしてくださった。また，留学生から各国の伝統的な遊びを紹介していただき，ともにその遊びを楽しむ場面も見られた。実技もまじえた具体的な内容の講義を受け，子どもは新たな知識を得ることができた。

【中国の書を見せていただく小学生】

（第３次の学習）

動画編集技能の定着

教師が撮影した過去の学校行事ビデオを素材に，ビデオ編集ソフトを使って映像の分割や接続・タイトルの挿入といった基本的な編集技能とともに，「誰に・どんな思いを伝えるために」といった目的意識を持つことの大切さや，目的にあった場面を活用させるための絵コンテ作成について学習した。

ビデオ係による第１次，第２次の学習の記録

本単元の活動記録に向けて，各グループから１名ずつビデオ係を募った。ビデオ係には，中学校のメディア担当教師から，機材取り扱いの留意点・基本的な撮影技能について指導を受けた。

第１次，第２次の撮影映像を見て，ビデオ係自身が「留学生のアップばかりで何の場面か分かりにくい」「逆光になっている」と振り返り，撮影の構図や撮影者の立ち位置の重要性に改めて気づいた。

本単元の活動を通して，ビデオ係はグループを代表して多くの操作を経験しビデオカメラやデジタルカメラの操作技能を身につけた。今後のメディア機器を活用する場面でも核となって活動にかかわってくれることと思う。

目的を意識した編集作業

ビデオレターは①２分間の交流活動場面，②グループごとに撮影する30秒アピールの２場面構成とした。作業にあたっては相手意識を持った編集・撮影となるよう，「いろいろなことを教えていただきありがとう」「私たちは今も元気でがんばっています」といった編集の目的（自分たちのグループに位置づいてくださった留学生に伝えたいこと）を設定させた。２度の交流を通して留学生とは双方向のやり取りを行うことができた。相手が目の前にいるので互いの思いも伝えやすかった。しかし，ビデオレター作成では相手が目の前にいない分，思いを伝えるための表現の工夫が特に重要になった。

デジタルカメラの動画撮影機能の活用

留学生との交流場面は子ども自らビデオカメラで撮影したが，子どもにはやや取り扱いにくい部分があった。そこで，各グループの30秒アピールについてはデジタルカメラで動画撮影するよう計画を変更した。デジタルカメラなら小学校にも充分な台数を備えているため撮影準備にも時間がかからない。また，再生やパソコンへのデータ取り込みもビデオ係自身の手で容易に行うことができるようになり，撮影・編集の効率が向上した。再生した撮影映像を見て，構図や自分たちの演技・表情に修正を加えながら２回目，３回目の撮影時間を行っていくこともできた。

ビデオレター完成

子ども自身が相互評価をしながら最終的な修正を行い，留学生への思いを込めたビデオレターが完成した。早速，留学生に贈り，反応（感想）を情報として子どもに伝えたい。そのことで，子どもの思いを留学生に伝えることができたのかできなかったのか，その要因は何か，子ども自身がふりかえることで，メディアを活用したコミュニケーション能力を育てることができると考えるからである。

(3) 成果と課題

○　本単元では教師側から「～してみませんか」と提案する形で学習を進めた。留学生との交流，交流後のビデオレター作成という内容は一定程度，子どもの学習意欲を喚起・維持することができたと考える。しかし，子ども自ら「～してみたい」と活動を起こす（あるいは起こすよう教師が仕組む）ことができれば，より意欲的に学習に取り組むことができるに違いない。自分たちが活動をつくっているという実感を伴う学習指導をしていく。

○　本校は，さまざまなメディアを活用可能な環境に

あるが，双方向のやりとりがなければ交流といえない。単にメディアの操作技能の会得のみならず，メディアを介した交流が成立するように，今後もその技能をコミュニケーションの手段として活用しようとする態度を育てていく。

5．3　中学校の事例

(1) 単元について

○単元名　「Home Visit in Okinawa」

○学年　中学校２年生

○実施時期　平成18年９月～19年２月

○単元の概要

本単元は，沖縄修学旅行でのアメリカ人家庭「Home Visit」に関し，当日の直接交流と，事前アポイントの電話や事後にお礼の「サンクス DVD レター」を制作して送るという間接交流とを織り込んだ単元である。相手家庭の顔も名前もわからない段階で自己紹介シートを書くという段階から，もてなしてくれた相手に感謝の気持ちが「伝わる」映像作品を作る最終段階に至るまで，日本語での自己表現・英語によるコミュニケーション・直接的な交流・様々なメディアを介した交流・多文化理解など，様々な要素が多重的に絡み合って単元が成り立っている。その中で，明確な相手意識を持ってよりよいコミュニケーションを創り出そうとすることの大切さや，広い「世界」の中に自分が居て他者と繋がっているという世界市民的な視点を獲得することが期待できる単元である。

○単元の目標

・沖縄在住のアメリカンファミリーと交流することで，多文化理解を深めることができるようにする。
（多文化理解）

・文化の違いを理解し，感謝の思いを発信することに喜びを感じながらコミュニケーションに関する継続的な意欲を持つ。　（共生を求めた情報発信・活用）

・外国人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができるようにする。
（外国語によるコミュニケーション）

・学習を通しての思いや考えを自分の言葉でまとめ，映像情報として表現できるようにする。
（自国語での自己表現）

（メディアリテラシーを生かしたコミュニケーション）

○計画（全30時間）

第１次　Home Visit に向け計画を立てよう（２時間）

第２次 サンクス DVD の構成を考え，プレゼントを作成しよう（４時間）

第３次 ファミリーに電話連絡を取ろう（２時間）

第４次 Home Visit（半日校外学習）（８時間）

第５次 Home Visit での経験をまとめよう（２時間）

第６次 サンクス DVD を制作しよう（10時間）

第７次 DVD をファミリーに送り，作品を学習発表会で交流しよう（２時間）

(2) 学習の実際

（Visit 前の学習　９月～12月）

本学年の生徒は昨年度１年間かけて取り組んだザンビアの中学校との文通，また１年半を費やし取り組んだ「デジタル絵本の制作と交流」を通して，間接的交流のスキルや，目の前にいない相手を思いながらコミュニケーションをどうとっていくか考えるという力はある程度育まれている。しかし，直接的交流の体験は少なく「自分の話したことがその場で外国の人に通じた」という成功体験が積み上げられていない。その事実と相関して，共生・交流に関する意欲面も他学年に比して低いのが特徴である。また直接的な言葉のやりとりの中で自己表現をすることが苦手であったり，互いの違いに気づいてもそれを肯定的に認める空気がやや弱かったりする面もある。その一方でマルチメディア的スキルは高く，メールのやりとりは厭わない実態もある。

そこで，毎時間実践的な英会話練習を取り入れることで自信を育み，コミュニケーションに対する意欲を持たせていった。今回の Home Visit は少人数で長時間の直接的交流となるため，個々が積極的に自己表現をし，なおかつグループで協力しながら円滑なコミュニケーションを進めていくことが大切であることを意識させ，会話の練習もグループの中でホスト役と生徒役を交代させながら地道に毎時間繰り返した。さらに出発前の取り組みとして，訪問家庭に直接電話をかけてあいさつをする授業を設定した。初めて話す相手に，しかも英語で話しかけるという状況に子どもたちは大変緊張していたが，いざ話してみると「OK, OK!」と好意的に受け答えしてくれる相手の対応に安心し，早く訪問したいという意欲の喚起につながった。

【ファミリーにあいさつの電話をする】

（Visit 当日　12月14日）

朝９時の出会いは緊張の中で始まったが，電話連絡の時と同様，ホストファミリーの方々の気さくで温かい歓迎を受け，徐々に子どもたちの表情も和らいで

いった。練習を積んだ英語での自己紹介が通じ，抱きしめてもらって嬉しそうな子ども，早くもファミリーの幼児に気に入られ手を握られている子どもなど，微笑ましい光景が繰り広げられた。出会いを終えた子どもたちは，それぞれのファミリーの車に乗り込み集合場所を離れていった。夕方５時に再び集合場所に送ってもらい別れるまで，グループメンバーで協力しながら何とかコミュニケーションをとり楽しい時間を過ごそうと全員が懸命に取り組んだようである。

【私の英語，ちゃんと通じるかな…】

引率者たちはアメリカ軍基地の中に入れないため，実際に子どもたちがどのようにホストファミリーと交流をしていたかは実際には見られなかった。しかし，グループに１つずつ配布し交流の様子を自由に撮影させたカメラの画像や感想からは，子どもたちが生き生きと活動していた様子がうかがえる。

お別れ直後の生徒への聞き取りより
T「ホームビジット，どうでしたか？」
S「最初はめっちゃ緊張したんですけど，すごく優しくお父さんやお母さんが話してくれて，嬉しくて(中略)お土産もたくさんもらいました。帰ったら，親に自慢しようと思います。」
T「みんなの英語は通じましたか？」
S「え，いや，まあ何とか。」
T「またこういう機会があったら参加したいですか？」
S「はい，絶対やりたいです。」

(Visit 後の学習　12月～２月の予定)

お礼の手紙を書く

Visit を終えた日の夜，子どもたちには感動の気持ちが熱いうちにまず日本語での「感謝の手紙」を書かせた。旅行終了後，すぐにその手紙を英訳し，グループ毎にホストファミリーへ送った。「英語の文法が少し間違っていても，言いたいことや伝えたい気持ちは伝わる。」と指導し，できるだけ自分の力で英訳に取り組ませた。

サンクス DVD の制作

現在は２月末の完成・送付をめざして，サンクス DVD 用の映像を撮影している。子どもたちは６月から10月にかけて「シーン作りに挑戦しよう」という映像情報の受信と発信に関する学習をしている。この学習の中で，基本的なショットの種類と撮影の仕方や，伝えたい内容とショットやカメラワークの関係，編集の効果など，伝えたい内容を映像で表現するスキルをある程度身につけている。サンクス DVD 制作では，「感謝の気持ち」や「Visit を終えての日常を元気に過ごしていること」など，グループ毎に伝えたい内容をはっきりさせて改めて絵コンテを描き，その絵コンテに沿ってそれぞれ映像を撮り下ろしている。Visit 前に考えていた DVD の構成が Visit を経て変わったグループも多く，感動が大きかった分，お礼の映像をしっかり工夫してホストファミリーに送りたいと考えている様子である。

【ホストファミリーとの様子（生徒が撮影したもの）】

今後 DVD が完成したら，ファミリーに送るとともに学習発表会で交流し合い，伝えたいことがきちんと伝わる情報になっているか，コミュニケーションのツールとして成立しているかを相互評価させていく予定である。

(3) 成果と課題

○直接交流のインパクト

直接交流経験の少ない子どもたちにとって，この Home Visit の体験は大変な刺激になった。外国の人たちとのコミュニケーションに関して消極的だった子どもたちが，体験直後の振り返りではほぼ全員が「有

意義だった」「楽しかった」「また会いたい」など，学習に対して肯定的評価をしている。

その一方で「もっと英会話を学習していけばよかった」「通じたことは通じたが思うようにはしゃべれなかった」という感想も多く見られた。この体験が次なるコミュニケーション活動への「今度こそ，もっと話したい，交流したい」という意欲の根幹になることを期待する。

○明確な相手意識

以前に取り組んだ映像情報の学習では，音声は使わず映像のみで伝えたい内容を表すというものだった。今回のサンクス DVD は，英語を通しての情報発信であるが，前回の学習が生きた作品が出来つつある。また，以前の作品の発信相手は同級生であったが今回は違う。誰に向けて発信しているのかという明確な相手意識を常に意識させながら，DVD 制作に取り組ませている。どうすれば伝わるかを考えながら交流することは，直接交流においても間接交流においても，コミュニケーションの最も基本的姿勢である。今後もこの姿勢を大事にしながら取り組ませていきたい。

6．今後の展望と課題

6．1　カリキュラム作成に向けて

本年度の研究は「単元開発」に徹したものであった。結果として，国際交流学習とマルチメディア学習に関し「コミュニケーション」を核として互いの視点を持った単元・題材を多く開発することができた。また，昨年度開発した単元内容を発展・検証することもできた。以下はそれらの例である。

小３：アメリカの交流校とクリスマスカード交換
小４：絵記号やジェスチャーで思いを伝える
小５：留学生に学園内を案内する
小６：留学生との直接交流・間接交流
中１：デジタル絵本を交流校と共同制作
中２：アメリカ人家庭への Home Visit
中３：アメリカ人教師を対象としたヒロシマエスコートプロジェクト

これらの単元・題材に取り組む中で，教師自身が多様な視点を持つことができ，子どもたちだけではなく教師のコミュニケーション能力も大いに向上した実感がある。

今後はこれまでの研究や本年度の研究で開発した単元や題材について，有用性や継続性を吟味し幼小中一貫カリキュラムとして，スコープをはっきりと設定しながら整理していく必要がある。

6．2　評価へのアプローチ

本年度，試行的に中学３年生の１単元について，毎時間のルーブリックを作成して評価するという今教科の「評価方法の確立」に関する研究も同時進行で行った。その結果，ルーブリックによる評価で特にスキル面の客観的評価が可能であることが分かった。しかし内面性の評価をどのように行っていくべきかの課題がいまだ残っている。

また，評価の観点を確立する意味でも，本年度の研究で策定した「７つの付けたい力」を精選し，観点と連動させうるよう整理する必要がある。教科として成立させる以上評価方法の確立は避けて通れない問題であり，更なる研究と検証を急がねばならない。

引用（参考）文献

1）松尾砂織，洲濱美由紀，岡芳香，加藤秀雄，杉川千草，朝倉匡夫，居川あゆ子，桑田一也，深澤清治，松浦伸和（2005）「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発（Ⅲ），『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第34号，pp. 83-91

2）簑島隆，大和浩子，山﨑裕昌，三田幸司，横村弥生，谷川佳万，金岡美幸，長松正康，山本透，（2005）「幼小中一貫におけるマルチメディア教育の教材・単元開発（Ⅲ），『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第34号，pp. 93-103

3）広島大学附属三原学園編著（2005）「21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」，pp. 26-113